

「心に響く聖書のことば ―信仰・希望・愛―」

コリントの信徒への手紙― 13章1～13 節

聖学院院長・女子聖学院中高校長 山口 博

久しぶりに皆さんと礼拝に与れる恵みに感謝したいと思います。

本日の全学礼拝はシリーズ奨励として「心に響く聖書のことば」という題をいただきました。わたしの心に響く聖書のことばをひとつ挙げるとするならば、コリントの信徒への手紙― 13 章のことばになります。特に 13 節の「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大なるものは、愛である」は、多くの人々の心に響く聖書のことばではないでしょうか。この 13 章は「愛の讃歌」とも言われ、結婚式でもよく読まれることばとして有名です。19 世紀の英国の神学者ヘンリー・ドラモンドは『世界最大のもの』と題した書物の中で、世界最大のものは「愛」だと述べています。その「愛」はどのように「信仰」と「希望」に結びつくのでしょうか。

まず「愛」とは人間にとって自然なことであり、誰でも愛し合うことができると思うかもしれませんが。男と女の愛、親と子の愛、あるいは兄弟姉妹の愛を思い浮かべることができるでしょう。しかし、同時に愛し合うことが如何に難しいか、ということも知っています。なぜなら本気で愛するならば自分を捨てなければならぬからです。

私事になりますが、北海道の大学で 15 年間に渡り宗教主任、聖学院大学ではチャプレンにあたる務めをさせていただきました。そこで毎年のように在校生、卒業生、そして教職員の結婚式の依頼を受け、大学キャンパス内での挙式に携わらせていただきました。その時によく引用させていただいた聖書箇所がこの聖句でした。「最も大なるものは、愛である」。結婚生活にとって一番大事なものは「愛」のはずです。北海道の結婚式は会費制で様々な形の式が挙げられます。毎回わたしは聖書の教えを御兩人に対して念入りに行いました。なぜなら厚生労働省が行なっている人口動態統計(2015 年確定数)によると年間婚姻数 635,156 組に対して離婚件数は 226,215 組ですから離婚率は 35.6%になります。この数字によると別居や家庭内離婚等を含めると、どれだけの夫婦が愛に満ちた幸せな結婚生活を送っているのだろうか、と考えさせられてしまいます。。誰でも初めは好きで結婚したはずで、永遠の誓いを立てたはずなのです。聖学院大学の皆さんはこれから結婚される方がほとんどでしょうから、厚生労働省の統計は気になるのではないのでしょうか。

13 章には驚くことがたくさん綴られています。2 節「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようと、愛がなければ、無に等しい」3 節「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」。好き嫌いの問題でないことがわかります。では聖書が語る「愛」とはどのようなものなのでしょうか。もう一箇所聖書をお読みいたします。マタイによる福音書 22 章 34 節以下には有名な「最も重要な掟」が綴られています。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」第2もこれと同じように重要である「隣人を自分のように愛しなさい」と、この二つのことが重要であると主イエスが申

命記の言葉を引用して語られました。神を愛することがなければ人を愛することもできないと聖書は語ります。そのように考えると「愛」と「信仰」との関係がわかります。第一にあなたは神を全身全霊で愛しているのか、と問われるのです。愛せない自分に気づきます。もしそうであるとするならば、人をも愛せないことになります。本気で「愛」を考えると絶望するしかありません。その愛に乏しいわれわれを神様はどうしてくださったのでしょうか。創世記の記事によると本来は神を愛するように造られたはずのわれわれです。しかし、原罪によって神を愛することができなくなったわれわれの姿があります。その事実を認めないわけには参りません。その罪深いわれわれに神様はそのひとり子であるイエス・キリストをお遣わしになりました。そして、世を愛してくださったのです。神から愛されなければ神を愛することもできなければ、人も愛することができないのです。つまり何よりも大事なことは神から愛されていることを信じるのが大事です。ですから信仰による以外にこの愛は受け取りようがありません。信仰は愛が注がれる器であるとも言われます。信仰と愛は結びつくのです。そこから愛することが始まると言えるであります。

もうひとつ考えなければなりませんことは、「希望」と「愛」の関係です。神に愛されていることが信仰によって分かった。目には見えない神の救いの約束を信じるのです。約束でなければ信じる必要はありません。目に見えるところを信じて意味がありません。キリストが十字架について死んでくださった事実がその背景にある約束です。その約束は希望を生みます。この信仰と希望がなければこの愛を行うことは難しいと言えます。マタイによる福音書6章 24 節には「だれも、二人の主人に仕えることはできない」と記されています。自分に仕えるか、神に仕えるかどちらかになります。われわれはいつも自分中心です。自分が主であるように思ってしまう。エゴセントリズム(egocentrism)とエスノセントリズム(ethnocentrism)そして、レジオセントリズム(religiocentrism)の言葉を思い浮かべる人もいられるかもしれません。いずれにいたしましても自己中心性から解放されなければ、われわれの生き方は危ういのです。神を主とするか、自分を主とするかどちらかです。両方に仕えることはできません、と聖書は語るのです。

周知のように「愛された経験のない人は、人を愛することが出来ない」と言われます。その通りだと思います。皆さんは愛されているでしょうか。愛されたことがない人は、人を愛せない。では愛されるのはどのようなことを指すのでしょうか。ヨハネの手紙一4章 9 節以下に「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」と綴られています。十字架があるのです。あの主イエス・キリストを見る時にわたしたちは真に神の愛に辿り着くのです。そのことが分かった時に初めて、このどうしようもない自分だけでも、人を愛することができるようにさせていただく可能性が出てくるのだと思います。

最初に申しました心に響く聖書のことば「信仰・希望・愛」は、三つのことが硬く繋がっていないければ、私たちは危うい生活になってしまいます。先ほども申しましたように、われわれに与えられている救いは、神様の約束です。コリントの信徒への手紙一 15 章 32 節以下には次のように書かれています。パウロは言います。「単に人間的な動機からエフェソで野獣と闘ったとしたら、わたしに何の得があったで

しょう。もし、死者が復活しないとしたら、食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」と書かれています。ここに「復活」という言葉が書かれています。「希望」の約束が示されているのです。「希望」は「信仰」の裏側と言えるかもしれません。もし死人が復活しないのならば、何のために人を愛するのかとパウロは語るのです。「信仰」に裏づけされた「希望」です。そしてこの「希望」がなければ「愛」を行うことがありえない。その意味で「信仰」と「希望」と「愛」の三つがわれわれの生活の内容だと聖書は語るのです。その中で一番大事なものが「愛」であることは間違いのないことです。しかしその愛は信仰がなければ成り立たない。希望がなければ与えられない種類の愛です。

皆さんは大学生ですから、これから結婚を考える時が来るかと思います。素敵な出会いもあるに違いありません。愛する人が与えられた時に、愛するとはどういうことか。この聖書は、われわれに大切なものを与えて下さっていると思います。ぜひ聖書の心に響くことばに導かれながら、神様に愛される生活、そして人を愛する生活を送ってほしいと願うのです。

2019年10月15日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」